

# 中曽根外交 レッスン1

～ アジア太平洋議員フォーラム参戦記 ～

通算26号

## ◆ 議員による国際会議

「拉致(abduction)を入れるのなら、話し合いは終わりにさせていただく」

「話し合いの席を立ってしまうというのは、いくらなんでも失礼ではないですか。ここはあくまでも話し合いの場でしょう」

韓国代表团と激しいやりとりが交差する。これは私が参加したAPPF(アジア太平洋議員フォーラム)的一幕。APPFは、東南アジア諸国や、中国、韓国、アメリカやチリなど太平洋に面する国々に呼びかけられて結成された国際会議。現在APPFの名誉会長である中曽根康弘元総理が、「政府の方針にとらわれることなく、自由な発想のもとで国会議員が議論する場をつくろう」と呼びかけて始まった。

14回目となる今年の会議は、インドネシアの首都ジャカルタで1月15日から20日までの5日間にわたって開催された。私は、島村宜伸団長、谷川秀善副団長に加え、民主党、公明党、社民党など9人の議員からなる日本代表団の一員として参加した。

## ◆ 息づく中曽根イズム

国会議員が議論するとはいえ、外務省のスタッフの手助けも借りるわけだが、今回もっとも驚いたのが、各国との交渉などを外交官に指揮しているのが、中曽根元総理の田中秘書(48)であったということ。外交官をも凌ぐような秘書が存在することに政界の奥深さを痛感した。田中秘書からは、晚餐会の合間などに各国と根回しするタイミングなど、中曽根外交の一端をお教えいただくことができた。

また、各国の代表も中曽根元総理のことを驚くほどよく知っており、今も中曽根外交が息づいていると実感した。

この会議では、各国がそれぞれの決議案を提出し、起草委員会→執行委員会→本会議の順番で各国の決議案を一つにまとめ、さらにすべての加盟国で決議する。私が担当したのは、「エネルギー安全保障」と「朝鮮半島の非核化」に関する決議案だ。

エネルギー安全保障については、日本とロシア、インドネシアの3案を、私がとりまとめをさせて頂いた。これには新聞記者時代に培った、ポイントをまとめる文章力が随分と役立った。



APPFの閉会後に議長席の前で記念撮影  
= 1月20日、インドネシアのジャカルタ・ヒルトンホテル

## ◆ 仁義なき外交最前線

しかし、問題が起きたのは朝鮮半島の非核化について。韓国と中国が「拉致(abduction)」という文言を入れることを頑なに拒絶し、逆に「APPFに北朝鮮を参加させろ」と主張する始末。韓国側もハンナラ党の代表は「拉致については、北朝鮮は弁解の余地がない」と理解を示したが、肝心の起草委員会に出席するのは北朝鮮寄りのウリ党の代表で、冒頭のような激しいやりとりにまで及んだ。

さらに韓国側は、起草委員会で席を立つのみならず、交渉再開後、別の部屋で行なわれていた本会議に北朝鮮の参加問題を抜き打ち的に持ち出してきた。紆余曲折の末、「拉致」という文言を共同声明に決議するのではなく、付属文書(annex)に載せることで双方が妥協することで落ち着いた。まさに右手で握手をしながら左手で殴るような外交の現場を体験できたことは、これからの大きな糧となった。

国益と面子がぶつかり合う外交の場に比べれば、品がないと揶揄される我が国会の与野党のやりとりも、実に紳士的なもの感じられてくるから不思議なものだ。

松本健太